

季語のころ



尾池和夫 (財団法人国際高等研究所長)
Kazuo Oike

ドラマ「坂の上の雲」

吉川左紀子さんから、「師走にはいり、忙しさの中にも来年への抱負があれこれ思い浮かぶ頃となりました」という文に始まる電子メールを受け取ったのは、現在使われている太陽暦（グレゴリオ暦）で、2009年12月2日、今では太陽暦でいう師走に入ってしまったことである。もはや来年の抱負を思い浮かべておられるという頼もしさを感じるとともに、何のご用が続くのかと、次の文が気になった。

案の定、わたしのあいさつを聞くのをいつも楽しみにしてくださっているというひとりで持ち上げておいて、次に、「このころの未来研究センターにいつも温かいご支援をいただき」と、プレッシャーをかけることばかり続き、最後に「さて、来年3月発行の『このころの未来』第4号は、3年めの区切りということで増ページの特別号になっております。その巻頭に、尾池先生に『変動帯の文化の中で育まれるこのころ』や『センターへの叱咤激励、未来への期待』などについてぜひご執筆いただきたく」という本題があった。しかも、長さは実に4ページ分もあり、締切は新年早々1月15日とある。もちろん2010年の1月15日であろう。吉川さんには、わたしが所長をつとめている財団法人国際高等研究所でも、これからいろいろ研究プロジェクトの企画などでお世話にならなければならないので、もちろんこの仕事は、お引き受けするほかはない。それからしばらく悩む数日が続いた。いったい何を書いたらいいのかという悩みである。

……というような文章を、あてのないまま書き始めて年末を過ぎた。ある日、東京のホテルの部屋で、他の原稿を書きながら、暮れから始まったNHKのドラマ「坂の上の雲」を見ていた、というより聞き流していた。そのとき、望んで従軍記者となって大陸に渡り、そこで俳句を詠む正岡子規（1867-1902）のことが耳に響いてきた。その瞬間、これを書こうと思った。

人のころというものは、考えているとはいっても、こういうふうには、たいてい瞬間的にひらめくことの積み重ねで、何事をも生み出していくのだと、わたしは昔から思っている。

念のために、この「坂の上の雲」というドラマを、わたしがどのような気持ちで見ているかということをもまず書いておきたい。原作の『坂の上の雲』は、1968年から1972年、産経新聞に連載されたものである。原作者の司馬遼太郎は、映像化することによって、文字で読む世界とは違い、好戦的な作品という誤解を受けるといわれる。そのことに作者のころがあると思う。その後、当時のNHKの海老沢勝二会長が遺族を説得して、2001年になって映像化の許可を得た。そのドラマが、2009年の横浜開港150年記念の時期に始まり、2010年の日韓併合100年の時期を経て、3年にわたって放送されることになった。そういう事情にどのような背景があるのだろうかと考えながら見ているということなのである。テレビドラマひとつでも、人は、このようにさまざまなことを、ころに描きながら見ているのである。

京都の正面通り、和菓子の甘春堂の向かいに耳塚が



NHKのスペシャルドラマ「坂の上の雲」第1部は2009年末に放送され話題になった。第2部は本年12月5日から、第3部は来年暮れに放送予定(提供:NHK)

ある。文禄・慶長の役のとき、朝鮮や明国の兵の戦死者の耳や鼻を吊った塚である。先日その前に立って、周囲の石柵に刻まれた役者たちの名を読んでいたら、たぶん近所の方であろうと思われる犬を連れて通りかかった方が教えてくれた。それによると、日韓併合のときの記念に、荒れていた塚をきれいにしようというので、資金を歌舞伎役者の寄付に求め、その役者たちの名を刻んであると聞いたという。寒の雨が降りそうな冷たい空気の中で、ころの中に少し複雑な気持ちを置きながらその話を聞いた。

俳句に「心」を詠んだ子規

さて、正岡子規のことにもどる。子規は、1895（明治28）年3月に日清戦争への従軍許可を得た。京都帝国大学創立の2年前である。4月10日、海城丸で宇品港を出港し、近衛連隊つき記者として金州、旅順をまわった。そのとき、金州で森鷗外に会った。4月28日、「陣中日記」を書いた。

「陣中日記」で詠まれた句は、自ら求めた道に勇んで出かける句から始まる。

行かば我れ筆の花散る處まで

そして大陸の景を詠む。伊予国に生まれた子規は、世界的に見ても規模の大きな活断層運動をとまなう中央構造線に沿った大地形を見ながら育った。

大國の山皆な低き霞かな

上陸して金州に行き、城門や戦跡などを見学した。海城丸に戻って2日ほどして錦川丸という別の船で旅順に向かった。「海上十余里十時頃出帆して一時頃には黄金山の砲台を櫓頭に望む」とある。

砲臺の舳にかすむ港かな

そして戦場に横たわる死体を見たあと、「三崎山を越えて谷間の畑をたどれば石磊々として葦やさしう咲く髑髏二つ三つ肋骨幾枚落ち散りたるははや人間のあはれもさめてぬしや誰とおとづるものもなし」と記し、春の草を詠んだ。従軍の初めで詠んだ句とは、まったく異なった子規のころが次の句に現れている。

亡き人のむくろを隠せ春の草

5月17日、帰国途上船中で咯血し、5月23日、県立神戸病院に入院した。重態だったという。7月23日、須磨保養院へ移り、8月には退院して松山に戻って、松山中学教員夏目金之助（漱石）の下宿に移った。そして10月31日、東京に戻り、次の年、1月3日、子規庵で句会を開いた。その席に森鷗外や夏目漱石が参集した。

このような歴史をあらためて読んだ後、俳句の中で



正岡子規(松山市立子規記念博物館所蔵)

ころがどのように詠み込まれているかに、わたしは興味を持った。まず子規自身が「心」を詠み込んだ句をあげてみたい。俳句は写生であると言った子規は、「心」をさまざまに、多くの句に詠んだ。

花をまつ心に似たり年のくれ

朝顔や我に寫生の心あり

さらに、芭蕉以来、俳句の中で詠まれた「心」をいくつか挙げてみたい。

野ざらしを心に風のしむ身かな

芭蕉

老農は茄子の心も知りて植ゆ

高浜虚子

炎天の遠き帆やわが心の帆

山口誓子

うつろの心に眼が二つあいてゐる

尾崎放哉

人はみな旅せむ心鳥渡る

石田波郷

身より心の心より眸の弾む枯野

楠本憲吉

綿虫にあるかもしれぬ心かな

川崎展宏

心いまだ燃ゆるものあり初鏡

鈴木真砂女

五十なほ待つ心あり髪洗ふ

大石悦子

心動くときは囲炉裏に掌を返す

金久美智子

このように、俳人たちにとって、ころは人のころであり、茄子のころであり、綿虫のころであり、

恋するころである。俳句は17文字の、世界でいちばん短い詩形である。その中で、俳人たちはさまざまの工夫をしながら、ころを伝えようとし、読むものはそのころを自分のころで読み取ろうとする。

例えば、山口誓子の句の季語は「炎天」、夏の季語である。俳句の技法としては、対句的表現で、「炎天の遠き帆や」と「わが心の帆」を対比させる。句を半分に割り、前半に切れ字を用いて対句的に配した。その結果、いわゆる句またがりになって、五七五のリズムを崩している。もちろん意識的に崩している。この句を読むひとは、まず、ざらざらと照りつける太陽と大海の沖に走る帆船をころに描く。そこへ、誓子の「心の帆」が持ち込まれるのである。

短歌の世界の「心」

芭蕉以来、俳人たちは季語を詠む17文字の中のところを詠み込んできた。それでは短歌の世界では、ころはどのように詠まれているだろうか。まず初めての勅撰和歌集、『古今和歌集』である。その仮名序には、和歌の部立、春・夏・秋・冬・賀・恋・羈旅・雑の中で、四季に関する代表的な景物「梅・郭公・紅葉・雪」を挙げて「梅を挿頭すより始めて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで」としている。後に「花・郭公・月・雪」が四季を代表する景物になるが、それは平安末期から鎌倉初期になってからである。

では、「心」という字が入った歌はどうであろうか。『古今和歌集』の歌の数は、全部で1,111首であり、その中に長歌5首、旋頭歌4首を含み、あとの1,102首はすべて短歌である。

「卷一春歌上」には4つ、例えば、
人はいさ心も知らずふるさとは
花ぞ昔の香に匂ひける

紀貫之

世の中に絶えて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

在原業平

「卷二春歌下」には9つあり、その中に、もともとたくさんの歌が収められている紀貫之の歌が3つ入る。従兄弟の友則の歌もある。

久方の光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ

紀友則

「卷三夏歌」には2つ、「卷四秋歌上」に4つ、「卷五秋歌下」には3つである。

心あてに折らばや折らむ初霜の

著作権保護のため
表示できません

『古今和歌集』(元永本、上巻一、春上より)左に「貫之」として「人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香に匂ひける」の歌が載っている。元永本は平安時代に豪華な料紙に書かれたもので、国宝。(東京国立博物館所蔵、Image:TNM Image Archives Source:http://TnmArchives.jp/)

置き惑はせる白菊の花

凡河内躬恒

いずれもたいそうよく知られている歌で、さまざまのころが歌われている。

「卷六冬歌」に「心」は出てこない。ところが「卷八離別歌」になると「心」の文字は11回も登場する。一方、『新古今和歌集』では、巻第一に「心」の字が入った歌が3つある。巻第二には2つ、巻第十一恋歌一では、当然ながら10首もあり、巻第十二恋歌二でも、やはり9首で、掛詞であっても自分や相手のころを詠み込む。

しかし、短歌の世界ならば、いつの時代でも常にころがたくさん詠まれているかという、そうでもないようだ。現代のもっとも注目されている歌人の1人が京都大学にいる。永田和宏さんである。そこで、この永田和宏さんの最近の歌集で、ころを探してみようと思った。

口に出さない「ころ」

永田和宏さんの第十一歌集、『日和』(砂子屋書房)を読んだ。2003年から2007年までの作品、597首を

まとめて1冊とした歌集である。「あとがき」によると、これが最後の新たな歌集で、以後は旧かなで歌を作ることになったという。また、年齢的には60歳までの作品が収められたという。

この歌集には、きっと「ころ」や「心」は出てこないにちがいないと、なぜか勝手に思いこんで読んでみた。手とか顔とか、からだとか死体とか、身体のことばはたくさん出てくるが、思ったとおりのころは出てこなかった。例えば、

もうたくさんと身体のどこかが拒否をしてわれは
今日から鬱に傾く

「心」という文字は、正確に言うと「心配」ということばで出てくる。

心配でしょうがないと心配の素がわからぬ電話が
かかる

放っておいてくれればよほど楽なのに心配し心配
しました君が病む

「居心地」という形で出てくる歌もあった。そして、「あとがき」になって、「心残り」と「決心」があった。「いつ死んでも自分の歌に関する限り心残りはないだろう」という。また、2010年の春からは、京都産業大学に新設された学部で学部長として、「この職を引き受けることに決心した」というのである。

思ったとおり永田さんの第十一歌集には、ころは出てこなかったが、気に入った歌を書き出して、くり返して読んでみると、歌の中に詠み人のころが見えてくる。「ころ」と口に出さなくても、見えてくるようなころがわたしは好きである。

夕ぐれの桜ただよう下にきて人は浮力をもてあますなり

太っちょの鯨のようだと叩きいる木魚には髭のあらざるものを

満開という咲き方をせぬゆえにこの白梅の古木を愛す

はっしはっしと熊蟬が打つ朝刊を取りに出でたる玄関の脇

鬼瓦が口をへの字に枉げたままだ若いぜと見下ろしている

父島にたったいっぼん残りたるムニンノボタンは見たかりしもの

永田さんは言うまでもなく、研究者として第一級であり、歌人として第一級であり、その超人のころを読み解くことは不可能であるが、つぎのような歌を読んでいると、錯覚かもしれないが、わたしのころと通じるものが少し見えてきたような気になる。

歌のあるゆえ研究は余業とぞ見做したがる奴はた



永田和宏『日和』(砂子屋書房)

見てしまう奴

古書市に湯川秀樹の献呈本見出たり署名というわざのかなしき

吊り革に手をかけるとき不意に湧く悔しさはすでに是非を越えつつ

傍観者の位置より吐かるる正論は切れ味まことに鋭きものぞ

嘘をつくなら大嘘をつけ春の鯉浮かびくるときにんまりとせり

言い訳をする必要はない研究に没頭できぬ理由だけを言え

空低き東京を発ち小田原を過ぎるあたりで怒りは萎えぬ

詩歌の世界の「ころ」も、ころの未来研究センターではぜひ研究テーマの中に取り込んでほしいと思う。

「遊びごころ、学びごころ」

ころの未来研究センター長の吉川左紀子さんは、研究所のウェブサイトのあいさつの中で、「ころの未来」という名称には、ころのうちに生まれる未来の時間、成長するころが生きる未来社会という2つの「時」の概念が織り込まれているという。そして、「ころは、わたしたち一人ひとりのうちにある、かけがえのない『何か』であり、直接目で見ることのできないはたらきです」と言われる。

わたしの大好きな女優さんである吉永小百合さんは、色紙に「遊びごころ、学びごころ」と書く。この2つのころは、確かにとても大事なころで、この両方を忘れずに、ころの未来研究センターに集う方々が、研究を進めてくださるとうれしい。そうすれば人類も、すぐには大量絶滅することなく、地球上に今しばらく住む場所を与えられるかもしれないと思う。